

インドネシアで受けた「ショック」

高橋和志

一九九八年四月、スハルト大統領の退陣を求めて、各地でデモが行われているさなか、私はインドネシアに到着した。青年海外協力隊員として、南スラウェシ州のある村落開発プロジェクトに携わるためである。治安状況が危ぶまれる中、任地にすぐに行くことは許されず、数週間、ジャカルタ市内にある隊員用のドミトリイで過ごすことになった。そこで初めて会う先輩隊員たちが口を揃えていることは、「君が赴任する村はブギス人という荒くれものが多いところだから、気をつけてね」、「僕の活動地では、子どもが悪さをすると『そんなことをしていたら、ブギスが来るわよ』」といった母親が子どもを脅すんだ」など、穏やかでないことばかりだった。

ブギス人はもともと海洋民族であり、かつては海賊として名を轟かせていたこともあったようだ。言葉もジャワやバリ人のように婉曲な言い回しをしながら、相手に本音を理解してもらわなくてはならないことはず、割とストレートである。だから、いろんな誤解がありながらも、「ブギスは野蠻だ」という固定観念が多くの人の間で定着している。

七月に入りようやく任地入りしたが、私が出会ったブギス人は、もちろん野蠻では

なかった。いちばで商品の値段を巡って喧嘩となり、人が殺害されたとか、貯蓄罐でだまされた人々が結集して、焼き討ちをしたとか、様々な噂は出回っており、大抵は真実であったが、そうした事件は、ブギスの村だから発生したのではなく、インドネシアでも、日本でも、どこにでもまあよくある話である。私が接したブギス人の大半は、牛を追ったり、稲を刈ったり、ドミノをしながら、日常を楽しみ、外国人である私に対しても、おだやかな態度で話しかけてきてくれる人たちである。

そんなブギスの村でも、私の生死を脅かすほどの野蠻なものに一度だけ出会ったことがある。それは山の中にいた。その日は、同じ村で活動している隊員仲間数人と、協力対象の中でも最も交通の便が悪く、なかなか活動が展開されないハラパン村（希望の村、の意）の視察にいくことを予定していた。幹線道路までは乗り合いバスに乗り、そこから村まで何十キロという道のりをひたすら歩く。山の中から道はあまりよくないし、くたびれるが、空気はとてもおいしく、景色も絶景で、仲間数人はみな山歩きを楽しんでいた。

が、そんな状況が突然一変した。仲間の一人が「いてっ！」と大声を発し、奇妙な

踊りをし始めたのだ。彼の方を見てみると、頭の上が真っ黒になっている。どうにかしちゃったか、と心配になってさらによく見てみると、その真っ黒な物体の正体はハチの成群で、こっちの方にも迫ってきていた。もう希望も何もない。

それからは、仲間同士、パニックだ。ある友人はハチを追いかけて、竹ざおで自分の体をバシバシ叩いているし、他の友人は煙で追い払おうと、タバコをふかし始めている。私は養蜂家のように無抵抗主義がいいのか？と最初おとなしくしていたが、容赦なくさされた。結局、一人が逃げ始め、みんな後を追うように逃げ回った。しかし、ハチはそんな僕らを追い掛けるし続けた。一時間から二時間は走っただろうか。民家の水浴び場に入ったところで、ようやくハチは退散した。一番逃げ遅れた私は、合計三〇カ所以上さされてしまった。下宿先に戻ると、お父さんが何やら虫の絵が描いてあるビンを取り出し、油薬を塗ってくれたが、それも効果なく、結局五日間入院するはめになった。ブギスの村の野蠻なハチがもたらした、「アナフィラキシーショック」だった。

（たかはし かずし／アジア経済研究所 開発研究センター）